



Title	福岡県におけるサイエンスカフェの実践記録分析：サイエンスカフェの継続性に注目して
Author(s)	三島, 美佐子; MISHIMA, Misako; 小林, 良彦 他
Citation	科学技術コミュニケーション, 30, 31-43
Issue Date	2022-01
DOI	https://doi.org/10.14943/100748
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83774
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC30_031-043_MishimaM.pdf



報告

福岡県におけるサイエンスカフェの実践記録分析： サイエンスカフェの継続性に注目して

三島 美佐子¹, 小林 良彦², 吉岡 瑞樹³

Analysis of Science Café Event Records in Fukuoka Prefecture: Focusing the continuity of Science Café

MISHIMA Misako¹, KOBAYASHI Yoshihiko², YOSHIOKA Tamaki³

要旨

著者らは、福岡県内に存在している(いた)サイエンスカフェについて情報収集し、特に継続的に運営している(いた)サイエンスカフェを抽出することにより、過去14年間にわたる福岡県での「継続的サイエンスカフェ」の開催状況を明らかにした。また、それら「継続的サイエンスカフェ」の多くが、「研究者」によって運営されている(いた)ことが分かった。加えて、より長期的に運営されている(いた)「継続的サイエンスカフェ」に着目することにより、特定会場での開催がサイエンスカフェの継続性に関わる可能性がみえてきた。過去のサイエンスカフェの開催記録は、主に開催案内・開催報告がインターネット上にのみ存在している場合が多い。現代における文化・実践のひとつとしてのサイエンスカフェを、調査分析し、より広範に比較可能とするために、また、後年分析可能な形で記録を継承するためにも、個々のサイエンスカフェ運営者による実践記録とその公開促進の事業化が望まれる。

キーワード：サイエンスカフェ、開催記録、継続性、地域、福岡県

Keywords: Science Café, Event Records, Continuity, Local, Fukuoka Prefecture

1. はじめに

2004年(平成16年)6月に発表された『科学技術白書』(文部科学省2004)のコラムで「気軽に国民が参加することができる科学技術に関する公開講話の場」として海外のサイエンスカフェが紹介されたことが、日本におけるサイエンスカフェの広がり発端であった。2004年の10月には京都市でNPO法人「日曜大学」がサイエンスカフェを開催し、これが日本で最初に開催されたサイエンスカフェであると言われている(中村2008)。これ以降現在に至る15年以上の間に、多くのサイエンスカフェが開催され、それらの記録が蓄積されつつある。また、回数を重ねたサイエンスカフェも増加し、自らの活動を振り返りつつ、来場者の構成や参加動向を分析した実践報告もみられる(例

2021年2月8日受付 2021年10月13日受理

所 属：1. 九州大学 総合研究博物館

2. 北海道大学CoSTEP

3. 九州大学 先端素粒子物理研究センター

連絡先：mishima@museum.kyushu-u.ac.jp

えば、後藤 他 2016; 菊地 他 2017; 奥本 他 2020; 吉岡 他 2020)。

上記のような開催記録や実践報告は、50年後や100年後の未来、日本における科学技術コミュニケーションやその中におけるサイエンスカフェの歴史を科学史・文化史として俯瞰的に大きく振り返るような際、欠かせない資料となる。それと同時に、個々の活動が、時間的・空間的・質的にどのような位置づけにある(あった)のかを知ることは、現在のサイエンスカフェ運営者やこれからサイエンスカフェを開催・運営しようとしている人々が、活動のあり方や意義を考える上でも有益である(例えば、小林 他 2020)。

中村(2008)は「新しいサイエンスカフェが全国で次から次へと誕生しつつある」興隆期当時において、「わが国におけるサイエンスカフェの全体像を鳥瞰することはきわめて困難」と述べている。それからさらに10年以上を経た現在、日本におけるサイエンスカフェの全体像を明らかにするには、特定の地域あるいはテーマごとなどのより小さな単位で俯瞰していくことが、まずは現実的であると著者らは考える。

より小さな単位という点で著者らは、自らの居住地における活動である「サイエンス@ふくおか」の7年にわたる72回の開催記録分析により、集客傾向などを長期的・客観的に俯瞰・検討した(吉岡 他 2020)。しかしながら、「サイエンス@ふくおか」の開催地である福岡県におけるその他のサイエンスカフェの全貌については、未だ明らかでない。また特定のテーマという点では、著者らは現在、サイエンスカフェの継続性に注目している。人々のサイエンスカフェへの継続的な関わりは、来場者やスタッフのリテラシー向上につながるなどが示唆されている(坂倉 2015; 小坂 他 2017; 奥本 他 2020)。また、小林 他(2020)では、「サイエンスカフェ@ふくおか」から派生した二つのサイエンスカフェの運営者へのインタビュー調査により、新たなサイエンスカフェの派生や広がり、ロールモデルとなるサイエンスカフェの継続開催が影響している可能性が示されている。従って、ある地域でどのようなサイエンスカフェが、どの程度継続開催されているのかを明らかにすることは、その地域における科学技術コミュニケーション活動の根付きや影響を知る上で有効であるかもしれない。

以上をふまえ、本稿では、特定の地域レベルの視点として著者らの活動拠点である福岡県を対象とし、これまでに開催されたサイエンスカフェの開催状況を調査し、特に継続的に運営されてきたものを抽出・分析する。本稿は、過去のサイエンスカフェを振り返ることから得られる知見を示し、それによりサイエンスカフェと科学技術コミュニケーションのさらなる興隆の一助になることを目指すものである。

2. 方法

2.1 「サイエンスカフェ・ポータル」を用いた情報収集

福岡県内でこれまでに開催されたサイエンスカフェの全体像を把握するために、インターネット上で最も広範にサイエンスカフェ情報を収集・発信している「サイエンスカフェ・ポータル」(サイエンスカフェを考える会 2005)から情報を収集した¹⁾。情報収集の対象期間は、福岡県内で最初のサイエンスカフェ開催が記録されてから2019年12月末日時点に至るまでとした²⁾。

2.2 「継続的サイエンスカフェ」の抽出

2.1節で収集したサイエンスカフェから「継続的サイエンスカフェ」を抽出するにあたり、本研究では、「複数年に渡って10回以上開催されている(いた)」ことを「継続的」とみなす基準とした。加えて、本研究で著者らが抽出する「サイエンスカフェ」の基準は以下の2点、

- (1) 公開性のある会場設定や飲食付きなど、気軽に参加することへの工夫が施されている (いた)
- (2) 誰でも参加できるよう広く公開されている (いた)

を満たすものとした。

今回は上記基準に即したものを便宜上「継続的サイエンスカフェ」として、分析を進める。個々の「継続的サイエンスカフェ」に関する情報は、「サイエンスカフェ・ポータル」をはじめとするインターネット、文献、過去における著者ら自身によるそのサイエンスカフェへの参加・参与の記録・記憶などから収集し、一部については運営者へのメール・電話・遠隔ビデオ通話などにより直接問い合わせた。

2.3 「継続的サイエンスカフェ」運営者の分類

小林 他 (2020) で著者らは、非研究者によるサイエンスカフェ運営の継続性が「既設サイエンスカフェ」「地元協力者」「地元行政関係機関」の存在によって支えられていることを明らかにしたが、運営者が「研究者」であるサイエンスカフェを含めた場合のその継続性に関わる要素については不明であった。そこで今回は、抽出した福岡県における「継続的サイエンスカフェ」の分類として、運営者が「研究者」か「非研究者」か、についても注目した。ここでいう「研究者」とは、「大学や研究機関に所属し、自身の専門性を持って学術研究に従事している人」とし、それ以外を「非研究者」とした。この定義に従えば、例えば、大学図書館の職員は学術研究に従事していない「非研究者」とし、大学院生は学術研究に従事している「研究者」として扱う。

3. 結果と考察

3.1 福岡県におけるサイエンスカフェ開催の推移

「サイエンスカフェ・ポータル」から、2006年～2019年の14年間において、計670件の福岡県内でのサイエンスカフェ開催記録が収集できた。図1は開催件数の推移を示している。図1からは、2006年から2014年にかけて、福岡県内のサイエンスカフェ開催数は、右肩上がりに増えていたことが分かる。開催件数のピークは2014年・2015年であり、年間71回(月に約6回)のペースで開催されていた。その後の年間開催件数はやや低下したが、年間60回前後のペースで開催件数が推移していることが分かる。

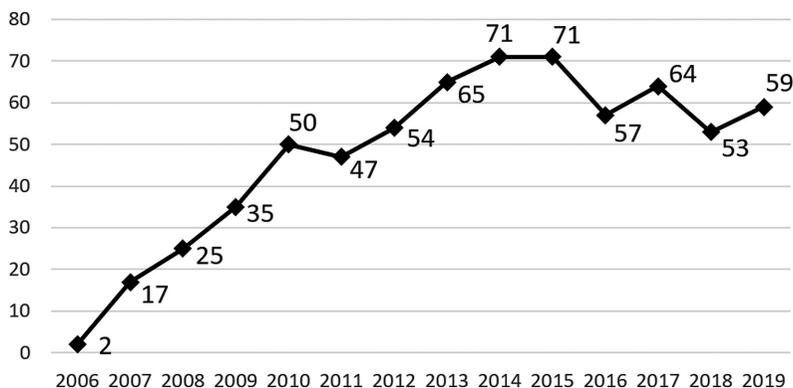


図1 「サイエンスカフェ・ポータル」に掲載情報が掲載された福岡県内のサイエンスカフェの開催件数

3.2 福岡県における「継続的サイエンスカフェ」

「サイエンスカフェ・ポータル」から収集した情報から 2.2 節の条件に基づき抽出した「継続的サイエンスカフェ」は、16 件だった (表 1)。表 1 には、「サイエンスカフェ・ポータル」および 2.2 節で示したその他の手法で得られた開催記録・会場・運営者の情報を掲載した。この 16 件の「継続的サイエンスカフェ」を視覚化するため、表 1 における「総回数」と「継続約年」でプロットし、図 2 に示した。また図 2 では、運営者の情報も視覚的に示した。

図 3 には、「継続的サイエンスカフェ」の継続期間を、開始年月と 2019 年 12 月末日時点での最終開催年月を示した。この図によれば、2006 年から 2017 年にかけて、毎年ほぼ 1～2 件 (最大 2011 年の 3 件) の「継続的サイエンスカフェ」が新設されていたことが分かる。一方、2013 年と 2014 年の 2 年は、「継続的サイエンスカフェ」となる新たなサイエンスカフェの開始はみられなかった。

以下に、「継続的サイエンスカフェ」の概要を、2.2 節の方法で得た情報に基づき示す：

● ぱりカフェ (表 1 No.1)

九州大学ユーザーサイエンス機構 (九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻 2009) の清水麻記氏を中心とする若手研究者有志「Varietas」が、2006 年に立ち上げたサイエンスカフェである (江藤 他 2008; 江藤 2009)。現在把握している限りにおいて、福岡県内で最初に実施されたサイエンスカフェであった。著者 (三島) の参与経験によれば、おしゃべり感覚の双方向性、魅力的な空間、音楽による演出、飲食の提供などの工夫が施され、綿密に企画・準備されたサイエンスカフェであった。「Qcafe」「カフェなんしょーと」など、その後の新たなサイエンスカフェの立ち上げにも影響を与えた。

● サイエンスパブ in 福岡 (表 1 No.2)

発足当時、九州大学理学研究院・助教であった山岡均氏 (現 国立天文台・准教授) が 2007 年に立ち上げたもので、福岡市内および近郊の飲食店を会場として、研究者と参加者が、お酒や食事を取りながら宇宙に関して雑談するスタイルのサイエンスカフェである (サイエンスパブ in 福岡 2008; 松本 2019c)。山岡氏が 2017 年度から国立天文台に転出した現在でも、山岡氏を核として、福岡市内で断続的に実施されている。

● 学研都市サイエンスカフェ (表 1 No.3)

北九州産業学術推進機構 (FAIS) が主催するサイエンスカフェ。2007 年 11 月に FAIS が主催する地域交流イベント「ひびきの祭」にて開催したことを契機に (北九州産業学術推進機構 2007)、年に 1～2 回のペースで開催を続けている。2019 年 11 月には 24 回目の開催を数えた。小・中学生向けを対象としており、サイエンスカフェ内で工作や実験を行うことが特徴である。講師は九州工業大学・北九州市立大学・早稲田大学の研究者が務めている。

● 科学夜話 Cafepedia (表 1 No.4)

2008 年に始まったこのサイエンスカフェは、北九州市在住の梅野岳氏が、小倉北区のカフェ「cream」にて実施していたものである。会場としていた「cream」の閉店に伴い、2017 年 12 月の第 89 夜をもって現在は休止中である (科学夜話 Cafepedia 2008)。当時としては、「非研究者」によって運営されていた唯一のサイエンスカフェだった。

表1 「継続的サイエンスカフェ」の一覧

No.	サイエンスカフェの名称	開催記録				会場		運営者		中心となる運営者
		初回年月	最終回年月	継続約年	総回数	頻度回/年	特定/不特定	名称・内容	主催名	
1	ぱりカフェ	2006.9	2008.1	1.4	19	13	不特定	九州大学大橋サテライト LUNETTE ほか	Varietas	研究者
2	サイエンスバブ in 福岡	2007.4	2019.3	12	33	3	不特定	飲食店	サイエンスバブ in 福岡 事務局	研究者
3	学研都市サイエンスカフェ	2007.11	2019.11	12.1	24	2	不特定	産学連携センター1号館ほか	公益財団法人北九州産業学術推進機構	研究者
4	科学夜話 Cafepedia	2008.2	2017.12	9.9	89	9	特定	cream (北九州市)	科学夜話 Cafepedia	非研究者
5	Qcafe	2008.8	2017.9	9.2	22	2	不特定	九大箱崎キャンパスほか	Qcafe, 九州大学総合研究博物館	研究者
6	サイエンス・カフェ@むなかた	2009.6	2014.3	4.8	10	2	特定	宗像ユリックス (宗像市)	宗像ユリックスプラネタリウム	非研究者
7	気象サイエンスカフェ in 九州	2010.2	2018.12	8.9	10	1	不特定	BIZCOLI 交流ラウンジほか	日本気象学会九州支部, 日本気象予報士会西部支部, 福岡管区気象台	研究者
8	サイエンスカフェ@九工大情報工学部	2011.3	2019.11	8.8	54	6	特定	九工大飯塚キャンパス	九州工業大学情報工学部	研究者
9	コトモ to サイエンスカフェ	2011.8	2015.12	4.4	15	3	特定	箱崎水族館喫茶室 (福岡市)	コネット → CLCworks	研究者
10	カフェで学ぼうがんのこと	2011.10	2019.12	8.3	89	11	不特定	ウィズスクエアほか	NPO法人ウィッグリング・ジャパン, 久留米大学先端精密治療研究センター	非研究者
11	サイエンスカフェ@ふくおか	2012.8	2019.12	7.4	72	10	特定	BIZCOLI 交流ラウンジ (福岡市)	公益財団法人九州経済調査協会 BIZCOLI	研究者
12	カフェ・なんしよーと	2012.10	2019.12	7.3	79	11	特定	カフェアラジレイロ (福岡市)	NPO法人 ミュージアム研究会	研究者
13	サイエンスカフェ@うきは	2015.5	2019.11	4.6	27	6	不特定	蛭子町珈琲店 (うきは市) ほか	サイエンス友和会	非研究者
14	生きものサロン	2016.12	2019.12	3.1	13	4	不特定	九州大学伊都キャンパスほか	津守不二夫 (個人)	研究者
15	福岡市科学館ネットワーク サイエンスカフェ	2016.12	2018.3	1.3	13	10	不特定	FUKUOKA growth next ほか	福岡市科学館ネットワーク	非研究者
16	サイエンス・プラランター	2017.7	2019.12	2.5	23	9	特定	九州大学芸術工学図書館 「AIVEA」 (福岡市大橋)	九州大学芸術工学図書館	非研究者

*情報は全て2019年末時点のもの。継続年とは、総継続月数を12で割り四捨五入した。開催頻度は継続約年を総回数で割り四捨五入した。1年あたりの開催回数で表している。最終回年月のうち、現在も継続しているものには最終回年月にアンダーラインを付している。また、継続約年が5年以上、開催回数が50回以上、頻度が年10回以上のものにもそれぞれアンダーラインを付した。会場については、運営者が特定の場所での開催を予定しているサイエンスカフェを「特定」、それ以外のものを「不特定」とした。「カフェで学ぼうがんのこと」については、両者が協働的に運営しているため、「研究者」「非研究者」として分類している。

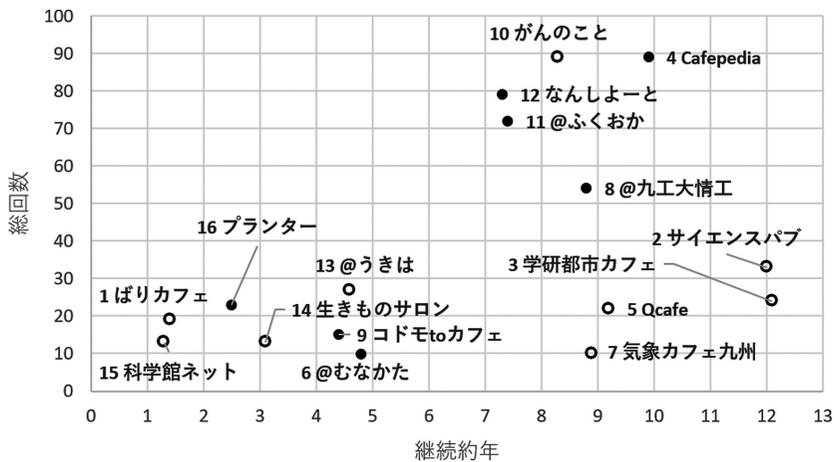


図2 「継続的サイエンスカフェ」の総回数と継続約年に関する分類
会場が「特定」の「継続的サイエンスカフェ」は黒丸、「不特定」のものは白抜き丸で示している。

	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
1 ばりカフェ		■	■											
2 サイエンスパブ		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
3 学研都市カフェ			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
4 Cafepedia			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
5 Qcafe			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
6 @むなかた				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
7 気象カフェ九州				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
8 @九工大情工					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
9 コドモカフェ						■	■	■	■	■	■	■	■	■
10 がんのこと							■	■	■	■	■	■	■	■
11 @ふくおか								■	■	■	■	■	■	■
12 なんしよーと									■	■	■	■	■	■
13 @うきは										■	■	■	■	■
14 生きものサロン												■	■	■
15 科学館ネット												■	■	■
16 プランター													■	■

図3 「継続的サイエンスカフェ」の開催期間

サイエンスカフェの名称は便宜的に省略して記載している。全体の期間を灰色で、初開催月と最終開催月を黒で示している。2020年以降も運営を継続しているもの、もしくは、継続予定のものは、全体期間の帯を図の右端まで伸ばしている。

● Qcafe (表1 No.5)

先述の「ばりカフェ」に参加した著者(三島)が触発され、立ち上げたものである。スタートした2008年度は九州大学の博物館実習の一環として、学生主体で企画・開催された(三島 他 2010)。その後は、会場やテーマにより、シリーズとして「脳シリーズ」「夜カフェ」「ミュージアムカフェ」「Cafe ソフル」などとして開催された。

● サイエンス・カフェ@むなかた (表1 No.6)

2009年6月~2014年3月に渡って宗像ユリックスプラネタリウム内のレストランなどで開催さ

れたサイエンスカフェである。計 10 回の開催を数えた (宗像ユリックスプラネタリウム 2002)。講師は国立天文台や JAXA などから迎え、天文学や惑星探査に関する話題提供が行われた。サイエンスカフェ終了後 (2014 年 4 月以降) は、その替わりとなる事業として、小学生を対象とした月例の講座が開催されている (宗像ユリックスプラネタリウム 2021)。

● 気象サイエンスカフェ in 九州 (表 1 No.7)

日本気象学会九州支部、日本気象予報士会西部支部、福岡管区気象台の 3 機関が主催するサイエンスカフェである。2010 年 2 月に始まり年に 1 回のペースで開催されている (日本気象学会九州支部 2009)。天気や地球温暖化などの話題が取り上げられる。研究者を「ゲスト」として迎え、テレビ局に所属する気象予報士などが「案内人」を務めるスタイルが特徴である。日本気象学会九州支部は 2013 年から鹿児島県でも、日本気象予報士会鹿児島支部と鹿児島地方気象台と共に同様のサイエンスカフェを開催している。

● サイエンスカフェ@九工大情報工学部 (表 1 No.8)

九州工業大学情報工学部が主催するサイエンスカフェで、2010 年に開始し、現在も継続している (九州工業大学 情報工学部 2011; 松本 2019b)。飯塚キャンパスにあるラーニングアゴラ棟などを会場として開催されている。講師は、九州工業大学情報工学部に所属する研究者が務めている。飯塚市と連携して、飯塚市役所にて、出張サイエンスカフェを開催した実績もある。

● コドモ to サイエンスカフェ (表 1 No.9)

このサイエンスカフェは、九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻の大学院生であった坂倉真衣氏 (現 宮崎国際大学・講師) らにより 2010 年に結成された「コネット (子どもと科学をむすぶ学生プロジェクト)」が運営していた (坂倉 2014; 坂倉 2015)。「コネット」は、「おしゃべりサイエンス教室」をはじめ、親子向けに良く練られた科学催事を開催していた (例えば、坂倉 他 2011; 藤野 他 2012)。メンバーの進学や卒業に伴い、ユーザー感性学専攻の卒業生らによる自主団体「CLCworks」に引き継がれた (CLCworks 2012; 坂倉 2015)。

● カフェで学ぼうがんのこと (表 1 No.10)

NPO 法人ウィッグリング・ジャパンと久留米大学先端癌治療研究センターが共同で運営しているサイエンスカフェである。2019 年 12 月末日時点では、93 回の開催を数えた (ウィッグリング・ジャパン 2018)。医療従事者や研究者から「がんの予防・診断やがん治療、先進医療、アピアランスケアについての話が聞ける」ことが特徴。2013 年 (平成 25 年) には福岡県の「ふくおか共助社会づくり表彰 協働部門賞」を受賞している (福岡県 NPO・ボランティアセンター 2013)。

● サイエンスカフェ@ふくおか (表 1 No.11)

背振山系が国際リニアコライダー (ILC) の建設候補地になったことを契機に、九州大学理学研究院素粒子実験研究室が立ち上げたもので、著者の一人 (吉岡) が核となり、ほぼ月 1 回のペースで開催されている (サイエンスパークふくおか 2014; 松本 2019c)。九州大学外の「サイエンスカフェ@うきは」(表 1 No.13) などの立ち上げにも関与している。詳細については、吉岡 他 (2020) および小林 他 (2020) を参照のこと。

● カフェ・なんしよーと (表1 No.12)

「ばりカフェ」に携わった研究者の有志が「ミュージアム研究会」を設立 (2009年からNPO化) し、その活動として行われている。NPO法人のメンバーである久留米工業大学の江藤信一氏が主に開催の中心を担っている。2012年に第1回目が開催されて以来、ほぼ毎月、継続実施されている (ミュージアム研究会 2015)。

● サイエンスカフェ@うきは (表1 No.13)

2015年から福岡県うきは市で開催されているサイエンスカフェ。2019年12月末日時点で27回の開催を数える (サイエンス友和会 2016)。会場は、うきは市内のレストランやカフェとなっている。主催は、うきは市で住宅設備業などを営んでいる川原弘幸氏を核とする、「サイエンス友和会」である。詳細は、小林 他 (2020) を参照のこと。

● 生きものサロン (表1 No.14)

「生きものサロン」は、2016年に九州大学工学研究院の新分野開拓助成によって開始された。九州大学工学研究院・准教授の津守不二夫氏が核となり、「学内での異分野連携を活性化させるサロン」として、2～3ヵ月に一度のペースで現在も継続開催されている (津守 2016)。内容としては、専門家からの話題提供に留まらず、九州大学周辺での観察会を開催することもある。

● 福岡市科学館ネットワーク サイエンスカフェ (表1 No.15)

科学技術振興機構 科学技術コミュニケーション推進事業「福岡市科学館を核としたくらしと科学の共創ネットワーク拠点づくり」の一環で運営されていたサイエンスカフェ。多様なステークホルダー間の活発な意見交換と、福岡市の持つ課題共有およびその課題解決を目指す取組として、多様なステークホルダーを講師に招いて開催されていた (福岡サイエンス&クリエイティブ 2019)。

● サイエンス・プランター (表1 No.16)

九州大学大橋キャンパスにある芸術工学図書館1階のアクティブ・ラーニングスペース「AIVEA (アイビー)」で開催されているサイエンスカフェ。芸術工学図書館の職員らによって運営され、九州大学芸術工学院の研究者や芸術工学府の大学院生が主なゲストとなっている。「新たな興味の『芽』を育むことをコンセプト」として開催を続けている (松本 2019a)。

3.3 福岡県における「継続的サイエンスカフェ」の運営者について

「研究者」が中心となって運営している (いた) 「継続的サイエンスカフェ」は10件、「非研究者」によるものが5件であった。表1をもとに運営者の分類ごとにまとめた「継続的サイエンスカフェ」の一覧を表2に示す。

表2 「継続的サイエンスカフェ」の運営者に関する分類

中心となる運営者	サイエンスカフェ名称
「研究者」	ばりカフェ, サイエンスパブ, Qcafe, コドモtoカフェ, @ふくおか, なんしよーと, 生きものサロン, 学研都市カフェ, 気象カフェ九州, @九工大情工
「研究者」・「非研究者」	がんのこと
「非研究者」	Cafepedia, @うきは, @むなかた, 科学館ネット, プランター

今回の調査では、「継続的サイエンスカフェ」の運営が「研究者」によってなされていることが多いことが明らかとなった。「カフェで学ぼうがんのこと」を含めると、16件中11件の「継続的サイエンスカフェ」が「研究者」によって運営されている(いた)。このことは、現在までの福岡県内におけるサイエンスカフェ運営において、「研究者」が担う役割が大きいことを示唆している。一方で、「非研究者」による「継続的サイエンスカフェ」は5件となった。この隔たりが、地域の特性であるのか一般的な傾向であるのかについては、他の地域における調査と比較・分析することにより、より客観的な判断が可能である。

特に、今回抽出された「継続的サイエンスカフェ」の中でもさらに7年以上続いている(いた)9件(図2)をみると、「科学夜話 Cafepedia」以外の「継続的サイエンスカフェ」は「研究者」が運営または共同運営しているものであり、より長期の継続性に「研究者」が担う役割が大きい可能性がある。

3.4 福岡県における「継続的サイエンスカフェ」の会場について

今回抽出された「継続的サイエンスカフェ」の会場は、「特定」か「不特定」かは半々であった。さらに7年以上続いている(いた)9件(図2および表3)をみても同様であり、より長期の継続性に会場の「特定」/「不特定」は関与していないといえる。他方で、それら9件の中で、特定会場で開催している4件は、同時に総回数も多いことが示された(図2および表3)。これら4件のサイエンスカフェは、継続約年が大きな値を持つと同時に活動を活発に継続していることが窺える。この結果は、活発に活動を継続していくうえでは、会場の「特定」/「不特定」も関係があるかもしれないことが示唆される。

なお、「非研究者」が運営する「科学夜話 Cafepedia」が会場の「cream」が閉店したことによって休止しており、特定会場の有無が継続開催に強く影響を及ぼした事例とも理解することができる。

表3 7年以上開催を続けている「継続的サイエンスカフェ」の特徴

サイエンスカフェ名称 (2019年末までの開催回数)	特定会場の有無	「研究者」が運営に 参画
サイエンスバブ (33)	×	○
学研都市カフェ (24)	×	○
Cafepedia (89)	○	×
Qcafe (22)	×	○
気象カフェ九州 (10)	×	○
@九工大情工 (54)	○	○
がんのこと (89)	×	○
@ふくおか (72)	○	○
なんしよーと (79)	○	○

3.5 サイエンスカフェの継続性に関する総合考察

3.3節および3.4節をまとめると、まず、福岡県におけるサイエンスカフェでは、中心となる運営者が「研究者」であることが「継続的サイエンスカフェ」の主要素であり、ついで、特定の会場を有することも継続性に影響している可能性が示唆された。ここで再び表1を見返すと、運営者が「研究者」でかつ特定会場であるサイエンスカフェは、ほぼ全て現在も継続していることがわかる³⁾。

すなわち、今回抽出された16件においては、これら二つの要素の組み合わせが、サイエンスカフェの継続性に影響していたことが示唆された。

なお著者らは、このような結果をもとに、非研究者よりも研究者が運営者であるサイエンスカフェが継続しやすいと一般化するものでも、サイエンスカフェの継続性を高めるならば研究者が運営者であるほうが良いと主張するものでもない。仮にもし「運営者が研究者であることがサイエンスカフェ継続の「条件」であるような状況」があるとすれば、より対等かつ双方向的な関係性を構築しやすいはずの科学技術コミュニケーションの場が、研究者主導になっている可能性があり、そのような状況は打開されるべきではないかと著者らは考える。

非研究者にとってサイエンスカフェを始めにくい、あるいは継続的に運営しにくい要因の存在が、小林 他 (2020) により示唆されている。今回の結果は、そのような「運営しにくい要因の存在」を反映している可能性がある。逆に、大学や研究機関にいる「研究者」の方が運営しやすいであろうと思われる理由の一つとして、著者らの経験則からすると、講師の選定・依頼のしやすさが挙げられる。また、特定会場があれば、都度会場を選定することや会場にあわせてレイアウト等を都度検討する負担が無くなり、開催が比較的容易であると予想される。しかし一方で、「非研究者」の梅野氏による「科学夜話 Cafepedia」や、特定会場を持たない「カフェで学ぼうがんのこと」が、いずれも継続期間が長いことは興味深い。

これらの継続性を支えている要素を明らかにするには、今後さらに、個々の運営者へのインタビュー調査が必要となる。著者らは、「非研究者」が感じているサイエンスカフェの開設・運営・継続への困難について、別途インタビュー調査をし、継続性を支えている要素を明らかにすることを予定している。

3.6 プロジェクト事業に伴うサイエンスカフェの特徴

最後に、プロジェクト事業に付随して開催されていたサイエンスカフェの継続性について注目してみよう。

プロジェクト事業にからんで立ち上がった「ばりカフェ」や「福岡市科学館ネットワーク サイエンスカフェ」は、運営者が「研究者」であれ「非研究者」であれ、1年あたりの開催頻度は高いものの、比較的短期間で終了している。本稿では一律に「複数年に渡って10回以上開催されている(いた)」という条件で「継続的」としたため、両者が抽出されてきたものの、両者ともに、実質2年に満たない“短期間”でその活動を終了していると同時に、1年あたりの開催数は抜きん出ている(表1)。いずれの場合も明確に、事業支援に伴う開催とその完了に伴う終了であり、プロジェクト事業等の期限つき予算を根拠に開催されたサイエンスカフェであるといえる。

「ばりカフェ」の場合、他のサイエンスカフェの立ち上げを促し、それらも今回「継続的サイエンスカフェ」として抽出されているという特徴もある。例えば、「カフェなんしょーと」は「ばりカフェ」の中心的なメンバーが活動を担っていることから、広い意味で継続性があったと言える。「ばりカフェ」が福岡県に初めてサイエンスカフェを導入した点とあわせて、その果たした役割は今後も高く評価されるべきであろう。

福岡市科学館では、「福岡市科学館ネットワーク サイエンスカフェ」に関わる支援事業終了後も、不定期的にサイエンスカフェが開催されている。元来、科学館は科学技術コミュニケーション拠点たる社会教育施設であり、サイエンスカフェが館の事業として組み込まれていることも珍しくない。このことから、科学館が運営しているサイエンスカフェは継続性を持ち得る点についても留意しておきたい。

プロジェクト事業によるサイエンスカフェが、ごく一時期であっても頻繁に行われたことの有効

性は、今後、具体的なデータをもとに検証されてしかるべきであると著者らは考える。

4. おわりに

本稿では、2006年から2019年にかけて福岡県内で開催されたサイエンスカフェについて調査した結果について報告した。今回の調査により、福岡県内では2006年からサイエンスカフェが始まり、近年は年間のべ60回前後開催されるようになってきていること、また、「継続的サイエンスカフェ」は16件あり、うち10件は現在も継続していることが明らかになった。16件の「継続的サイエンスカフェ」について分析を行った結果、少なくとも福岡県においては、運営者が「研究者」であることと特定の会場を持つことの二つが、その継続要因の一部であるらしいことが示唆された。

現在のところ、本稿のような地域レベルでの分析は少なく、地域間での比較がまだ十分できない状況にある。今後、他の地域において本稿と同様の調査がなされ、それらの間で比較・分析が行われることにより、地域の特色や地域差が明らかになるとともに、日本全体の状況が明らかにされることが期待される。

今回の調査・研究の第一段階は、インターネット上の情報を頼りに行われた。インターネット上に十分な情報が公開されていない、もしくは、ウェブサイトが閉鎖または行方不明になっているものも多々あった。そのため、本稿で扱えなかったサイエンスカフェがあった可能性は否定できない。この点は、本研究の限界でもある。

日本におけるサイエンスカフェの実態やその受容・変遷等を明らかにするには、個々の運営者による実践の記録とその公開が必須となる。日本でサイエンスカフェが開催され始めてから15年以上が経過し、情報が既に一部失われつつある現在、実践の網羅的かつ緻密な記録と未来における分析を可能とするためのその継承は、非常に重要である。全国規模でのサイエンスカフェ運営者への記録収集・保持・公開への呼びかけやそのアーカイブ化も望まれる。

謝辞

本稿作成にあたり、梅野岳氏（北九州市）、江藤信一氏（久留米工業大学）、角田佳昭氏（宗像ユリックスプラネタリウム）、坂倉真衣氏（宮崎国際大学）、佐々木圭子氏（九州産業大学）、津守不二夫氏（九州大学大学院工学研究院）、松本祐典氏（九州大学大学院芸術工学研究院）、三毛恵氏（九州工業大学情報工学部）、山田亮氏（久留米大学先端癌治療研究センター）、および、立花浩司氏（公立はこだて未来大学）の各氏にはサイエンスカフェに関する情報提供・情報修正などにご協力頂いた。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 「サイエンスカフェ・ポータル」は立花浩司氏（公立はこだて未来大学）が管理・運営しているポータルサイトである。著者らは今回、立ち上げの背景や経緯、情報収集方法などについて、立花氏へインタビューを行っている。掲載されている情報は、立花氏自らが日々、インターネット上で幅広く情報を収集・記録してきたものである。サイエンスカフェが実施され始めた初期の段階から、全国規模で自ら情報を収集・整理し、ウェブ掲載しているポータルサイトは他には見られない。よって著者らは、「サイエンスカフェ・ポータル」を「インターネット上で最も広範にサイエンスカフェ情報を収集・発信している」ポータルサイトであると判断した。
- 2) 2020年以降については、新型コロナウイルス感染症の拡大が騒がれ、サイエンスカフェの開催につい

- ても全国的に平常通りでない状況となっていると推察されるため、今回の調査対象期間から除外した。
- 3) 唯一休止した「コドモ to サイエンスカフェ」は、運営者である坂倉氏の転出とその後の多忙がその要因である。

文献

- CLCworks 2012: 『CLCworks』, <http://clcworks.web.fc2.com/clcworks/Welcome.html> (2021年10月8日閲覧).
- 江藤信一・清水麻記・鮫島祥子・藤原昌子・土屋潤・伊藤綾子 2008: 「サイエンスカフェ『ばりカフェ』」『科学技術コミュニケーション』4, 31-39.
- 江藤信一 2009: 「食と感性プロジェクト」『九州大学ユーザーサイエンス機構 平成16年度～平成20年度 最終報告書』, 62-69.
- 藤野理香・田中あかり・坂倉真衣・三島美佐子 2012: 「骨格標本に対するネガティブな先入観の乗り越え — ワークショッププログラム『九大博物館を探検 骨から分かることをおしゃべりしながら考えよう!』の事例から—」『九州大学総合研究博物館研究報告』10, 51-62.
- 福岡県 NPO・ボランティアセンター 2013: 「平成25年度『ふくおか共助社会づくり表彰』表彰式を開催しました!!」, <https://www.nvc.pref.fukuoka.lg.jp/promotes/detail/283> (2021年10月8日閲覧).
- 福岡サイエンス&クリエイティブ 2019: 『科学技術コミュニケーション推進事業「問題解決型科学技術コミュニケーション支援」平成28年度採択企画「福岡市科学館を核としたくらしと科学の共創ネットワーク拠点づくり — 地方都市の課題を多彩なノウハウを持つ市民と解決し未来を創造する—に係る運営業務」終了報告書』, https://www.jst.go.jp/sis/funding/past/items/h28houkoku_fukuoka.pdf (2021年10月8日閲覧).
- 後藤千春・吉住千亜紀 2016: 「宇宙カフェ継続の秘訣と展開 — 宇宙カフェ50回を振り返って—」『和歌山大学宇宙教育研究所紀要』5, 51-56.
- 科学夜話 Cafepedia 2008: 『科学夜話 Cafepedia』, <http://www.cafepedia.net/> (2021年10月8日閲覧).
- 菊池結貴子・江崎和音・中島悠・石川遼子・伊與木健太・正田亜八香・音野瑛俊 2017: 「マニアの社交場『BAP cafe』: “狭く深いサイエンスカフェ”の魅力」『科学技術コミュニケーション』20, 3-13.
- 北九州産業学術推進機構 2007: 『ひびきのNEWS 第19号』, https://www.ksrp.or.jp/pdf/news/hibikino_019.pdf (2021年10月8日閲覧).
- 小林良彦・吉岡瑞樹・三島美佐子: 「九州北部地域における草の根サイエンスカフェの広がり: 『サイエンスカフェ@ふくおか』から生まれた二つのサイエンスカフェの開設動機と準備過程」『サイエンスコミュニケーション』10(2), 74-79.
- 小坂有史・川本思心 2017: 「サイエンスカフェを担う人々が目指す方向性は同じなのか?: 広島大学サイエンスカフェを対象としたインタビュー調査から」『CoSTEP Report』3, 1-41, <http://hdl.handle.net/2115/65222> (2021年10月8日閲覧).
- 九州大学大学院統合新領域学府ユーザー感性学専攻 2009: 「専攻設置の経緯」, <http://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/kss/overview/background> (2021年10月8日閲覧).
- 九州工業大学 情報工学部 2011: 「サイエンスカフェ@九工大情報工学部」, <http://www.iizuka.kyutech.ac.jp/pr/sciencecafe> (2021年10月8日閲覧).
- 松本祐典 2019a: 「サイエンスカフェへようこそ! 福岡のサイエンスカフェ [Vol.2]」『生物の科学 遺伝』73(1), 95.
- 松本祐典 2019b: 「サイエンスカフェへようこそ! 福岡のサイエンスカフェ [Vol.3]」『生物の科学 遺伝』73(2), 198.
- 松本祐典 2019c: 「サイエンスカフェへようこそ! 福岡のサイエンスカフェ [Vol.4]」『生物の科学 遺伝』73(3), 305.
- 三島美佐子・佐々木圭子 2010: 「2008年度博物館実習におけるサイエンスカフェ実習」『九州大学総合研究博物館研究報告』8, 61-65.

文部科学省 2004: 『平成 16 年版 科学技術白書』.

宗像ユリックスプラネタリウム 2002: 「過去のイベント」, <https://yurix-planetarium.jp/eventing/past-event/> (2021 年 10 月 8 日閲覧).

宗像ユリックスプラネタリウム 2021: 「小学生向け講座 第 7 期ほしぞら友の会 (2021 年度) 会員募集」, <https://hosizora.com/school/> (2021 年 10 月 8 日閲覧).

ミュージアム研究会 2015: 『ミュージアム研究会』, <https://www.facebook.com/640630566083373/> (2021 年 10 月 8 日閲覧).

中村征樹 2008: 「サイエンスカフェ: 現状と課題」『科学技術社会論研究』 5, 31-43.

日本気象学会九州支部 2009: 「気象サイエンスカフェ」, <http://msj-kyushu.jp/event.html#chapter2> (2021 年 10 月 8 日閲覧).

奥本素子・池田貴子・川本思心・種村剛・西尾直樹・朴炫貞・早岡英介・古澤輝由・村井貴 2020: 「地域で定期的に行われるサイエンスカフェはどのような意義を生み出しているのか」『日本科学教育学会年会論文集』 44, 265-268.

坂倉真衣・田中あかり・藤野理香・三島美佐子・岡崎正哲 2011: 「実践報告: 『地球カフェ』 映像と実験で体感, すごいぞ! 『グラウンドキャニオン』」『九州大学総合研究博物館研究報告』 9, 77-82.

坂倉真衣 2014: 「親子で楽しむ体験型サイエンスカフェ —コドモ to サイエンスカフェの紹介」『サイエンスコミュニケーション』 3(1), 42-43.

坂倉真衣 2015: 「子どもたちの視点から考えるサイエンスカフェと小学校理科との連携の可能性 ~親子を対象とした『コドモ to サイエンスカフェ』を事例に~」『科学技術コミュニケーション』 18, 31-44.

サイエンスカフェを考える会 2005: 『サイエンスカフェ・ポータル』, <http://cafesci-portal.seesaa.net/> (2021 年 10 月 8 日閲覧).

サイエンスパークふくおか 2014: 『サイエンスカフェ@ふくおか』, <https://sciencecafefukuoka.jimdo.free.com/> (2021 年 10 月 8 日閲覧).

サイエンスパブ in 福岡 2008: 『サイエンスパブ in 福岡』, <http://www.sciencepf.sakura.ne.jp/sci-pub/main.html> (2021 年 8 月 8 日閲覧).

サイエンス友和会 2016: 「サイエンスカフェ@うきは」, <https://www.facebook.com/science.youwakai/> (2021 年 10 月 8 日閲覧).

津守不二夫 2016: 「生きものサロン」, <https://sites.google.com/view/ftsumori/home-page-jp/> いきものサロン (2021 年 10 月 8 日閲覧).

吉岡瑞樹・三島美佐子・小林良彦 2020: 「『サイエンスカフェ@ふくおか』の実践と分析」『サイエンスコミュニケーション』 10(2), 62-67.

ウィッグリング・ジャパン 2018: 「カフェで学ぼうがんのこと」, <http://wig-ring.info/cafe/> (2021 年 10 月 8 日閲覧).